

政務活動視察報告書

2026年1月12日

八女市会議員 森茂生

視察日程 2026年1月7日～9日

(視察先)

- 1, 沖縄県 座間味村座間味 109 座間味村役場
- 2、株式会社 島嶼生物研究所 南部事業所 沖縄県豊見城市金良 244-5

(視察内容)

有害鳥獣対策について 座間味村におけるイノシシ駆除対策

座間味村とは

沖縄県那覇市から高速船で約50分、西へおよそ40kmの東シナ海に浮かぶ亜熱帯の島々『慶良間諸島』。座間味村は、その西半分の島々からなる離島村です。人が住む座間味（ざまみ）、阿嘉（あか）、慶留間（げるま）の三つの島と、数多くの無人島が作る内海は豊かなサンゴ礁が生き物をはぐぐむ海域として、2005年ラムサール条約登録地となり世界的に認められました。初夏の満月の夜にサンゴの一斉産卵が見られる慶良間は、サンゴのふるさとと呼ばれます。





1、座間味村（慶良間諸島）におけるイノシシ駆除について

慶良間諸島にいるイノシシは「リュウキュウイノシシ」ではない。座間味のイノシシは、座間味島（慶良間諸島）に生息する外来種のニホンイノシシ、またはそのイノシシが家畜豚と交配したイノブタで、農作物への食害やウミガメの卵の食害を引き起こし、地域生態系に深刻な影響を与えている問題のイノシシを指します。元々は食肉用として持ち込まれたものが島内で繁殖し、島内の天敵の不在と高い繁殖力で個体数が増加し、駆除が追いついていない状況です。

座間味のイノシシの特徴と問題点

外来種: 琉球列島の在来種であるリュウキュウイノシシではなく、本州などに生息するニホンイノシシが外来生物として定着しています。

イノブタ化: 豚との交配によりイノブタ化が進み、繁殖力が高まっています（イノシシは1度に4~5頭、イノブタは5~6頭出産する）。

生態系への影響: 島の生態系のトップに君臨し、リュウキュウヤマガメの卵や農作物（イモ類、イネなど）を食害し、生態系を攪乱しています。

海を渡る: 渡嘉敷島から座間味島へ、あるいは周辺の無人島へ海を泳いで渡って分布を広げていると考えられています。

駆除の難航: 捕獲わなや柵設置などの対策が取られていますが、個体数減少には至っておらず、有効な駆除方法の確立が課題となっています。

座間味のイノシシは、単なる害獣ではなく、島の生態系と農業、そして希少生物保全にとって深刻な問題となっているのです。

リュウキュウイノシシは、沖縄や奄美諸島に生息するイノシシの固有亜種で、本土のニホンイノシシより小型で、島嶼環境に適応した野生動物です。森林を中心に生活し、ドングリなどの植物からミミズ、ヘビなどの小動物まで食べる雑食性で、沖縄では「ヤマシ」や「カマイ」とも呼ばれ、古くから重要な食用・狩猟対象であると同時に、畑を荒らす害獣としても存在しています。

慶良間諸島の外来性イノシシの対策に関する要望書（抜粋）

日本爬虫両棲類学会は貴職に対し以下のことを強く要望する。

1、慶良間諸島の外来性イノシシ個体群が地域の生物多様性に及ぼす被害の深刻さ、残された時間の短かさ、そして環境保護・希少野生生物保全における行政としての責任の重さを正しく認識し、この国内外来種の慶良間諸島からの完全除去に向けた具体的な計画を立案し、施策を迅速に実施すること。

以上、日本爬虫両棲類学会第58回大会総会にて決議する。

令和元年11月24日 日本爬虫両棲類学会 会長 太田 英利

本要望書の送付先は以下の通り。

- 環境大臣 小泉 進次郎
- 沖縄県知事 玉城 デニー
- 渡嘉敷村長 座間味 秀勝
- 座間味村長 宮里 哲

株式会社 島嶼生物研究所

島嶼生物研究所は、琉球列島における生物多様性の保全を目的とし、これらの問題に積極的に取り組むために設立いたしました。琉球列島の自然環境保全を第一義に考え、保全のための知識と経験、技術を蓄積し、活動しております。

2025年からは、これまでに琉球列島において蓄積した経験を活かし、野生動物

を扱う専門事業者として、北海道をはじめとする日本全国においても活動を展開することといたしました。野生動物と共存する社会の実現を通じて社会に貢献をすることを目指します。(島嶼生物研究所ホームページより)



(座間味村に仕掛けられたネット製の囲い罠)



ネット製のイノシシ囲い罠

上記写真はアメリカ製のネット製の囲い罠ですが、実際に雑木林の中に設置している現場。イノシシは警戒して簡単には罠には入らないため、事前に餌付けし、慣らしながら誘導しなければならぬため時間がかかる。

ライフル銃で狙撃する

島全体で約 50 か所、雑木林中に事前にトウモロコシ等で餌付けを行い餌場に来るよう準備をしておく。

餌場に来た場合はセンサーでスマホに知らせが来るようしておく。

イノシシが来たという知らせがくればライフルをもって現場に行き狙撃する。



餌場と狙撃する距離は 20～25 メーター程度、近距離なのでほぼ 100%狙撃に成功するようだ。狙撃され死んだイノシシが横たわっていても餌場には次のイノシシが来るということだ。母イノシシを狙撃して横たわっていても、子どものイノシシは乳を加えにくるため子どもイノシシを何頭も狙撃する場合があるということだ、少々かわいそうな気もするが、仕方がない。

まとめ

2026 年 1 月 8 日、島嶼生物研究所 環境部 自然課の塚本研究員と那覇市よりフェリーで座間味村に渡航。座間味村産業振興課長の宮平明さんと同行し「イノシシ囲い罠」設置している現場を視察。環境省と沖縄県の委託を受け、主にはイノシシ駆除を行っている。(費用は環境省 50%沖縄県 50%)

イノシシ駆除も色々あるが、これといった決め手がない。何かいい方法があれば

いいのだが。これといった決め手がないというのが現状だ。

慶良間諸島のイノシシは、外来性イノシシで地域の生物多様性に及ぼす被害が深刻なため、完全に除去するため駆除している。リュウキュウヤマガメの卵や農作物（イモ類、イネなど）を食害し、生態系を攪乱しています。

渡嘉敷島から座間味島へ、あるいは周辺の無人島へ海を泳いで渡って分布を広げていると考えられているようだ。

この島のイノシシは食用には全く利用されていないため、毒殺はできないのかと尋ねたら、環境省が「毒殺はダメ」と言ったようだ。（森茂生）